

神社崇拜と佛教

衛藤 即應

今日佛教學會主催の卒業生送別豫餞會に於て、何か特別の講演をするやうにと、既に昨年から豫約されてその演題も「自力と他力」として之を豫告して置いた位であつて、草案も既に出來てゐたのである。

然し乍ら、近日、我國の思想界は非常に緊張し今や澎湃として日本精神運動は全國に波打つてゐるが如き狀勢であるに對し、近く現實社會に出でて活動せんとする卒業生諸君は、果して如何にして此の激流を乗り切るであらうか、又此の問題に對して如何に自己の所信を定めて之を導いてゆくのであらうか、と考へ及ぶ時、私は諸君に對しての此の最終の講演に、斯る緊急の問題を默過して教理上の項目に就いて話すに忍びない。其處で此處に既定の演題を改めて「神社崇拜と佛教」と題して、卒業生諸君を當機とし一般聽講の學生諸君を結緣衆とし御列席の諸先生を誠證と爲して、私は日本精神運動の事實上の中心問題となる神社と佛教との關係に就いて卑見を述べたいと思ふ。由來、私は、一個の學究として時世に疎く時代の思想界の動きにも無關心であるかの如く考へられて居るのであるが、俗謡にも「鳴かぬ螢が身を焦がす」とあるやうに、之れでも時世を憂慮する点に於ては決して人後に落ちぬつもりであります。然し、私は常に現今の佛教者が

時流を追ふて遅くれざらん事を恐るるもの如き態度を甚だ遺憾とするものであります。マルキシズムが流行するとマルクス主義と佛教とを結びつけようとするし、反宗教運動が起れば又之れに迎合して自ら佛教の内幕を暴露して得意となり、或ひは又、マルクス主義流行以來、經濟觀念を基調として社會現象を論ぜんとする傾向が著しく現はれて來ると「佛教と經濟」と言ふ題目の許に、佛教から經濟原理を説明しようと努力すると云ふが如き者も現れて來る、勿論佛教そのものは人間生活の真相を明らかにし、その生活を指導する原理を規範として説いてゐるのであるから、佛教精神から見た經濟ならばそ處に意義もあらうけれども、佛典の中に西洋の經濟學說の如きものが説かれてゐるかの如く考へて、廣い佛典の中を涉獵してわづかの經濟現象を取扱つた材料を探がし出して、佛教が恰も經濟原理を説いてゐるかの如きものは如何であらうか。例へば、「醫學と經濟」と題して醫學から經濟原理を見出さんとするのと同じではなからうか、勿論佛教も醫學も經濟生活の中にあるのであるからして、經濟を離れでは無いのであるが、その本旨は云ふまでもなく經濟を教ふるものではないのである。甚だしきは「道元禪師と經濟」などと云ふ題目を見るに至つては、私はその意を了解するに苦しむものである。斯如佛教徒が常に時流を追ふて轉々するのは抑も如何なる理由であらうか。

宗教としての佛教の使命は、人生の光りとなつて、個人の生活の支柱となり廣く社會を嚮導すべきはづのものでなければならぬのに、恰も社會から見捨てられん事を恐るるものやうにかへつて時世に追從してゆくやうでは、提灯持ちが後からぶら／＼行くやうなもので、佛教本來の使命は失はれその存在を疑はれなければならぬやうになるのである。

想ふに、之は從來の佛教の研究は余りに時代の信仰に無頓着に歴史や教理を研究して、現代に生命ある宗教として之を研究しなかつた結果である。本來佛教學なるものは、信仰の理論的根據を明らかにせんとしたものであるから、その教理

研究は直接時代に動いてゐる實際の信仰と關係を持たなければならぬ。又佛教を歴史として過去の事蹟を研究するのは佛教の歩いた足跡を知ると云ふ事だけに留つてはならぬ。過去の研究は、現在ある状態は如何にして斯くなつたかを知ると同時に、將來あるべき状態を規定するが如きものでなければならぬ。人が常に後ろをふりかへつて見るのは、行く先を確かに見定めん爲でなければならぬ。此の意味からして佛教の歴史的研究はその過去に残した功績を誇る爲であつてはならないのであると思ふ。

されば、若し佛教の研究が單なる哲學としての研究でなく、又歴史としての研究でなく、今日尙生きてゐる宗教として研究せられるならば、その研究に依つて少くとも現代の佛教信仰は斯くあらねばならぬと云ふ事が確立して、實際生活を指導して眞の宗教としての役目を果すことが出来るであらうと思ふ。

今年の思想界は恐らくは日本精神運動がその中心となるのであらうかと思はれ、佛教徒又之れに追従して、各宗派はそれ／＼日本精神とその宗派との關係を明らかにしようとする努力してゐるやうである。蓋し之は日本精神運動の中堅となる識者に於ては、日本人に對して日本人としての精神を自覺せしめようとするのであるからして、此の運動が健全に且つ方法を誤らないで正しく行はれるならば、實に結構な運動であるけれども、之が波動の浪に乗つて地方に打ち上げる時は、意外の變形をなして地方の人心に波及しつゝあるやうである。それは即ち此の運動と排外思想との混同、否、日本精神運動即ち排外思想なりと誤解せられ、延いて反宗教的の傾向を帯びて、當面には形の變つた排佛的の傾向が甚だしく現はれて來てゐるやうであるが、之れ實に憂慮すべき事であつて、各宗が急に緊張して此の問題に對するやうになつたのは蓋し當然であると思はなければならぬ。然し、今私が此の時事問題を取り上げて論じようとするの

は、決して佛教と日本精神の歴史的關係を究めて佛教の過去の功績を讃へ、兩者の融和を計らうとするものではなく、此の實際運動に處して我々の確固たる立場を明らかにしようとするものである。此の運動の根本に横たはる實際上の問題は神社崇拜と佛教であつて、之は長い間事實上の問題として論議せられたのであるが、今尙未解決のまゝ残されてゐるからして、吾人の立場から之が根本的な解決を試みて、今日の日本精神運動を正しく指導したいと思ふのであります。それについて想ひ起こすことは、曾て反宗教運動が吾が思想界に起つた時、時事新聞社の記者が訪ねて来て、現下擡頭しつゝある反宗教運動に對して私の意見を述べよ、と言ふ注文であつたが、私は別に此問題を重視してゐなかつたので纏つた意見も持ち合はさないが、質問を出して呉れるならばお答をしようといふと、先づ第一には宗教は擡取するといふが如何、と鋭く攻撃の一矢を向けて來た、そこで私は佛教では喜捨と言ふことはあるが擡取といふことは全然之を知らない、アバタも笑靨といふが嫌いなものならば笑靨もアバタに見えるのではなからうか、といふやうに氣輕に答へた、それから次から次と質問に答へたのでありますが、要するに反宗教運動誠に結構である、佛教が若し其の運動で亡びてしまつて再起出来ないやうなものならば、無論社會に無要なものであるから宜しく之を破壊すべきであるし、若し人類は宗教無くしては生きられないものであり、佛教が宗教として永遠の生命を有するものならば必ずや今よりも立派な形に復興し甦生するであらう。見よ、今日の大東京を、震火災以前の東京は世界五大強國の一である吾が大日本帝國の首都として決して誇るべきものではなかつた、道路は文字通りに紅塵萬丈、凸凹の甚しいものであつた、家屋は、われ／＼は大夏高樓櫺比して、と形容するが、當時獨乙に在つて私は新聞を見ると日本のヒュッテが何軒焼けたと出てゐる、ヒュッテとは日本語に譯して小舎といふ、わが帝都の大高厦樓を彼等は指して小舎と稱してゐるので、私の日本精神は少からず憤

慨に堪へなく大いに抗議を申し込んでやらうと、さて反省して見ると、吾等の家といふ文字はウ冠に豕と書いてあるので泣寝入りの外はなかつた。斯の如き舊東京市が大震災といふ自然の脅に脅威かされ灰燼に歸した、然るに數年ならずして帝都は復興して全く其の面目を一新し、道路は坦々たる砥の如く、家屋も亦最早家に縁のある家ではなく、數層の所謂ビルディングと稱する者が少くも市の中央部には列をなして聳てゐる。今日では世界一流の大都市に比して決して遜色のない立派な帝都となつた。いかに舊東京が見すほらしい者であつても自ら之を破壊してまでも之を一新しやうとしないのは人情であるが、一旦自然の不可抗力に倒さるゝと、必要さへあれば今日の如き立派な東京に甦生したではないか。佛教も永い間の傳統や因習に引きづられて生氣を失ふてゐるが、さりとて佛教徒自ら之を破壊して甦生を計ることは人間の弱さで所詮望み難い、そこに反宗運動といふ外部からの力で之を破壊して呉れるならば。佛教は恐らく面目を一新して甦生するであらう、此の意味で反宗運動は内心之を歓迎してゐる——と、いふが如き答をした。當時其の談話が反宗の驍將秋田雨雀の反宗の論文と並べて時事新聞に掲載され、何だか私が其の一方を擔ぐやうに思はれて甚だ迷惑に感じたことがある。

曾ては反宗教運動を斯くの如く輕視し、寧ろ冷笑を以て之れを迎へた私も、今や日本精神と言ふ權威ある名の許に、實際に於ては形の變つた反宗教運動に向はんとする傾向がある爲に、地方の人々は非常な衝動を受けつゝあると云ふ事を屢々耳にし、之を默視するに忍びず先に自ら進んで之れに對する意見の一端を教學新聞にも述べたやうな次第である。抑も、日本精神運動なるものが、最近俄かに擡頭して來た動機を考へて見ますと、歐州の大戦を境界として世界の情勢に非常な變化が行はれてゐる事に注意しなければならぬ。戦前に於ては世界の大勢は國際間の融和と云ふ事が常に

爲政者の指導精神となつてゐたのであつて、經濟學說一つでも從來國民經濟學として説かれてゐたものが、次第に世界經濟學即ち國際經濟學として説かれんとする傾向を帯びてゐたのである。然るに歐洲大戰後に於ては各國は戰爭に依つて破壊された國內の秩序を恢復し、國力を充實するに急であつて他を顧みるの余地が無くなつた。その結果として、各國は世界の爲に考へる前に先づ自國を中心に考へなければならなくなつて、國家中心、民族本位に全ての問題を解決せんとする傾向が強くなり、それがやがて政治的には獨裁政治を呼び起して、ムツソリニーのファシズムとなり、ヒットラーのナチスとなり、又經濟的にはブロック經濟の唱道となつて來たのである。而して戰前の經濟的門戶開放主義は次第に鎖國的傾向を帯びて來たのである。然るに幸ひにして日本は戰禍の中心から遠去かつて居た爲に、斯る思想界の變動に對してもそれ程直接の影響を蒙らなかつたのであるが、近く滿洲事變以來國際的獨立狀態を余儀なくせられ、その結果俄かに經濟及び政治を始めとして全てを國家本位に考へ、全國民に強い國民的自覺を喚起せねばならない機運に到達して此處に日本精神運動が擡頭したものと思はなければならない。尙昨年來左傾思想の人々が次から次へと轉向を表明し出したのも、日本精神への反省がその主なる原因を爲してゐるので、計らずも此の運動の表面化する先驅を爲してゐると思はざるを得ない。翻つて想ふに我國は明治以來國民が余りに西洋の物質文明に心酔して、唯物萬能の思想に感溺した結果として、一時は左傾思想が全國の青年に感染して左傾運動まで起るに至つたのであるが、滿洲事變以來各國の國家的利己主義の爲に吾が國が國際的孤立に墮入るに至り、今更の如く從來の主張を検討しなほし、自己を反省し故國を想ひ始めて日本人は日本精神に生く可きを自覺するに至つた事は實に慶す可き事である。然し時代の動きは左を矯めて右へ轉じ、又その極端に走るとなると、その利害功罪果していづれぞやと疑はざるを得ないのである。蓋し、先

に述べたやうに、今日の日本精神運動の實際の動が、古事記や日本書記に基づいた古神道を中心とする思想的復古運動であつて、地方に依つては神社中心の狭い意味の政教一致の傾向が著しく現はれて、その結果は自ら排外的な氣分となり實際生活の上では正面に排佛的傾向になつて現はれつゝあるやうであるが、今日の日本精神の鼓吹が果してこれで良いのであらうか、私は思ふ、日本精神の反省とは現代の反省でなければならぬ。日本精神とは二千五百九十四年の歴史の中に發育生長して來た建國の精神であつて、日本民族の肉となり血となつて燦然たる光輝を發揮し、遠くは日清、日露、世界大戰、近くは滿洲事變等に活躍し世界に雄飛せるわが民族の力こそ日本精神そのものの發露に他ならぬのである。現代の日本人は皆此の精神に生きて居るのである。復古の叫びは、歴史の中に之が歪曲せられた時か又は見失はれた時にこそ必要なのであるが、私は決して今日の日本精神が歪められてゐると思はない。されば今吾等の反省すべき日本精神とは今の日本精神でなければならぬのである。例へて云ふならば日本固有の精神は植物の種子の如きもので、外來の文化は光熱となり肥料となつて、歴史の中に之を培養して花を開き實を結ぶに至らしめたもので、儒者も、佛教も乃至近代の西洋文化も皆悉く日本精神を培養し哺育して來たものである。斯くして吾等は今日の燦然たる日本文化を誇り得るのである。

今此處に純日本精神の凝結たる赤子が産れたとすると、此の子供は成長して、小學に入り中學を経て大學の教育を受け立派な教養ある日本人と成つたとすると、これは多分の外來思想を消化してゐるからといふので、復古の名の下に、赤子の状態に歸らなければならぬとすれば、魔法の杖を有せない以上は出來ないことではないか。

日本精神は儒教、佛教、凡てのものを消化して發育する生命力であつて決して理論に抽象化せられたものではないの

である。勿論日本精神の生きて來た歴史上の足跡を反省して、之を學的に研究し闡明すると言ふことは極めて必要なことであつて、謂はゞ小學から中學大學の各時代の寫眞を見て昔を偲び今を反省するが如く、日本精神の過去の姿をはつきり見定めて、今日の成長を喜び、且つ將來の發展を期待するが如きものである。然しながら、之を學術の俎上に戰せて論理のメスを振ふて解剖した日本精神は死物であつて、其は抽象化され理論附けられたものであることを忘れてはならぬ。されば之を以て直に生きた現代の日本精神を指導せんとすると、復古懷舊の退嬰主義に陥らざるを得ないのである。排外的な日本精神運動の誤は蓋し此に兆すものと思ふ。試みに近日、日本精神を主張せんとするものの理論を見よ、其の頭腦は已に發育した日本人であり、儒教、佛教、殊に西洋思想を充分に理解した教養ある人であつて、其の日本精神の理解なり理論なりは、佛教や西洋哲學の考へ方でありながら、諸君は大學で儒教や佛教や、西洋思想を學ぶといふは甚だ不都合である、宜しく古代の純日本思想に歸らねばならぬといふやうに聞ゆる。これ實に甚しき自己矛盾ではないか、然らば現代の教養せられ發育した日本精神とは何んであるか。

いふまでもなく、わが日本民族は皇室を中心とせる上下一体の國民的自覺の上に立つて、億兆心を一にし知識を萬國に求めて、文化を向上し、國力を増進せしめたところの民族の統一的力である。命令一下、國民一体となつて矛を取つて邪を拂ひ、不義を懲らして國威を世界に發揚した力なのである。維新以來半世紀に足らない短い日月の間に、西洋で三四世紀の長い間に發展した文化を移入し消化し同化して、今や世界文化の最先端に立つ我國の發展は、曾つては西洋人は驚異の眼を見はつて驚いた、が驚異は讚美となり、讚美は嫉妬と變り、今や日本は外交上孤立の覺悟を有するまでに至つたではないか。此の奇蹟的なる發展こそ實に日本精神の發露である。

然るに神道者の或る者は古書に之を求め、二三の言語を近代的に解釋して日本精神は眞であり、美であり、善であり眞善美一体である、これぞ維神の道であると言ふてゐるが、然し、斯くの如く表現された日本精神は概念化せられたる机上の日本精神に過ぎないものである、加之斯の如きは決して日本特有のものではなく、人類一般の文化の理想であり、特にこれは近代獨乙の文化哲學の中心的の考へ方である。今日吾々の主張する日本精神はもつと具体的な生きたものでなければならぬのである。

二千六百年の歴史の中に生きて發育して來た日本精神は、外來のあらゆる文化を消化し同化してきた民族の生命力である。只單に攝取し同化するばかりではなく、反對のものも亦、以て自己を顯揚するものとなるが如き、實に力強い確乎不拔の國民精神でなければならぬのである。されば日本文化の歴史を見よ、政治に、教育に、文學に、美術等に皆此の精神が現はれてゐるではないか。

先日の讀賣新聞に「珍しき大佛殿の瓦」と題して關野博士の談が出てゐましたが、これに依ると奈良平安の昔に唐の輸入模倣の瓦だけでなく、己に日本國有の瓦が出来てゐたといふことである、されば一枚の瓦にまで日本精神の同化力が現はれてゐるのである。最近各方面の識者が一堂に會して日本精神の座談會が催され、其内容を新聞で見ると、日本精神とは何ぞや、といふに實に十人十色で神儒佛基その他の人々の見方がそれ／＼異つてゐるのである。佛典に名高い模象の喩に、多くの盲者が集つて象の種々異つた部分を摸して其の形を判斷したといふ話があるが、今日の日本精神を摸索する者は恰も摸象の喩を實地に行くものの如く、其のいふ所いづれも誤りではないが、全体を見ることの出來ない一面觀に過ぎないので、全体を見る者から見れば其部分を捉へて全体となす、そこに非常な誤りがあるのである。

季節も丁度今頃であらうか、或風流人が探梅に出かけた。野に山に終日歩きまはつたが時節が少し早いので梅を探し出すことが出来ないで、「盡日春を尋ねて春に逢はず」疲れ切つて吾が宿に歸り、椽先きに一服してさて、何氣なく庭先を見ると吾が庭の古木に一輪二輪梅花が綻びかけてゐたので、「春は枝頭に在つて己に充分」と詠じたとか聞いてゐるが、日本精神とは何ぞと探し廻つてゐる人々も、恰も此の探梅者の如く外ばかり探し廻つて自己の精神を忘れ、昔ばかり見て現代生きてゐる日本精神を見逃してゐるのではなからうか、敷島の大和心は、と問はれた時に、朝日に匂ふ山櫻花と答へた歌人こそは、櫻木を截ち割つて花の種子を探し出さんとするものよりは遙かに賢明であると思はざるを得ないのである。禪門に脚下を照顧せよといふ語があるが、それは只履物に氣を付けよといふだけでは決してない、かゝる時に吾等に反省を促す爲の警語であつて、今の日本精神運動は須らく脚下を照顧すべきである。

見よ、現在の日本精神は昔の上下をぬいで洋服を着てをり、弓矢を捨て、鐵砲や飛行機を用ひて活躍しつゝあるではないか。建築も交通も、その他一切の日本の文化は皆斯くの如く變つて來てゐるのである。家屋が洋館になり、殊に日本女性の美とし特有のものとせられる着物すらも漸次洋装にかはりつつある。が然し、いかに洋館に住すればとて其の精神は西洋魂にはならぬ、又日本女性の美德が洋装に包まれて失はれゆくやうなことが有つてはならぬのである。或いはん、外來文化を攝取するのは物質上のことで精神は日本固有のもの其のまゝであると、然し眼に見ゆる物質界に進歩のあるやうに、眼にこそ見えないが精神界も同様に發展してゐるのであつて、今日の日本精神は決して古代其のまゝのものではない、之を教養發育せしめたものは佛教を中心とした外來思想であつて、日本の物質文化が西洋文化を攝取したと同じやうに日本の精神文化は長い歴史の中に佛教を同化して發展したものである。

かくの如く、現代の日本精神は外來文化の中に生き且つ活動してゐるのに、何故に佛教に依つて養はれ佛教を同化した日本精神は排斥せられねばならぬのであらうか。何故に佛教の衣を着た日本精神の價値は認められぬのであらうか。最近、私は或る地方の有力者から聞いたことであるが、其の地方では官公立の公けの場所の催しとして官吏に屬するものが來て、日本精神鼓吹の講演をなし「諸君の信する佛教とは何であるか、あれは印度の黒ん坊の教ではないか」といふ如きことを大聲叱呼して喝采を博してゐると聞いた、かくの如きは勿論小供仲間の罵聲に等しきものであつて、敢て之を眞面目に取りあげて論すべきものではなく、堅い佛教の信念を有する者ならば其の卑劣なるを嗤ひ、其の人格を疑ふであらう、又更に一段高い立場に在る人ならば寧ろ其の偏狹にして不謹慎なることを憐むであらう。私は決して宗派心から此の奇激なる語を憤慨するものではないが、只私の恐るゝのはかゝる不謹慎なる言葉を弄して、さなきだに動搖し易い青年の心情を亂し、思想の安定しない青年男女の信仰の根底を破壊することである。今や日本の思想界の不安動搖の時に際して、苟も公人として地方人心の教導に心を注がねばならぬ時に當つて、却つて自ら偏狹なる國粹主義を奉じ、日本精神の名の下に排外的奇激の言辭を弄し、地方の信仰を攪亂する如きことは實に許し難きことである。若し彼等にして日本歴史を緋いて、日本精神の權化として祭られたる神社の神体、即ち日本歴史上の偉人國士の信仰が、殆んどすべて佛陀の教であることを見出すならば、彼等は自ら日本精神を侮辱するものといはねばなるまい。又畏くも歴代の皇室の御信仰は何であつたか、殊に歷朝の中には身に法衣を纏はれた法皇の居ますことに思ひ及ぶならば、彼等は不敬罪を以て責むべきものといはざるを得ないのである。いづれから見ても實に不謹慎の極みである。また假令外來思想を排斥すとしても、佛教を西洋思想の移入と同じやうに考へるのは非常な誤りであつて、佛教は已に奈良朝の昔聖德太子に依つて日

本精神に同化せられ、傳教、弘法二大師共に尊皇護國の日本佛教の基を開き、爾來純然たる日本佛教として發展し、現に最も勢力ある諸宗派の祖師はいづれも日本精神に依つて佛教を活かしたのである。即ち日本精神の鎔爐に入れられた日本の佛教が今日信仰界を支配してゐるのであつて、決して印度の佛教、支那の佛教ではないのである。外國の果實も日本人が喰へば日本人の血となり肉となつてゐなければならぬのである。

されば日本精神の聲の下に排佛を行はんとするが如きは、恐らく明治初年の排佛棄釋の余威を以て神佛を分離して、神社を神道に屬した結果、所謂神道といふ偏狹なる宗派心に驅られて地方の神道者が佛教を排斥する口實に利用したものであると思はざるを得ない。もし果して日本精神と言ふ權威ある名の下に行はれる之等の運動が、思想的鎖國主義となつて排佛的傾向を帶び、而も之を歴史にまで及ぼさんとするに至つては實に其の意を了解するに苦しむのである。

前に述べた如く眞の日本精神とは、皇室を中心とせる國民一体の觀念に生きることであり、國民一体と言ふことは國民の一人々々が外國へ派遣された大使の如く、國家を代表する覺悟を有つことであつて此に於て始めて上下一体であり、國民各自が國を負ふて立つと言ふ自覺が、強固なる國民的自覺となるのである。それは佛教で云へば華嚴の六相圓融の毘盧遮那の法界の實現した國家である。内に省みるは外に對する時であるから、斯の如き國民的自覺に生きる日本精神を、今日特に之を反省すると言ふことは、外に對する爲の反省でなければならぬのである。然らば此の精神の發する所世界の文化を攝收し同化するのには嘗に我が民族自体の發展に資するのみであつてはならぬ、必ずや世界の文化を指導し向上して世界人類の福祉を増進せんが爲でなければならぬ。又矛を取つて邪を斥け不義を拂ふのは嘗に自國の安全を守るのみではなく、進んで世界の平和を將來せんが爲でなければならぬのである。果して此にわが日本民族の理想がありとする

ならば、日本精神の發露は實に菩薩の精神であるといはねばならぬのである。

斯くの如く、吾々の日本精神は遠大の抱負を持つ日本精神にまで今日は發展してゐるのである。もし過去の活力を以て未來を下するならば、此の理想は決して空想ではない。此の如き活力のある日本精神を反省し自覺せしむるのが日本精神運動でなければならぬのである。

明治維新の大業は尊皇倒幕の大旗を掲げ、而も時代の大勢に動かされて排外をモットーとしたのであるが、その實は開放であつて、知識を萬國に求むるやうになつたのである。然るに當時の國學者の聲は排佛棄釋となつて、爲政者亦之を斷行して神佛分離となり、德育と宗教を引き離すことになつた。其の結果は明治の晩年に至つて國民の知識は豫期の如く普及し向上したのであるが、德育の涵養は之に伴はないといふよりは、寧ろ知識の向上と反比例して人心益々惡化し、法網愈繁くして之を犯かすの點智益巧妙となるといふ有様で世道人心漸く頹廢して來た、そこで爲政者は從來對立し反目してゐた神基佛の三教合同を唱へ、宗教の力を以て之を善導しやうとした。次いで宗教を利用する思想善導となり教化總動員となつて、國民漸く宗教の必要を自覺し、教育方針も亦一變して極端に宗教を排斥してゐた學校教育にも喜んで宗教を迎へ、之を加味するといふやうになつて、延いては宗教教育の必要が高調せらるゝやうになつた。かくして全体の傾向は學校に宗教講話があり、兒童は日曜學校に行つて宗教情操を養ふといふやうになつて、神社に參拜すると同様に寺院に參詣し奉仕することを奨励するやうになつたのは誠に結構なことと思ふのである。然るに今日漸くにして其の必要を認められてきた宗教教育を、日本精神の名の下に再び排佛的となり、地方によると佛寺の前を素通りして神社にだけ參拜せしむるといふ如き以前の學校教育に逆戻りしつゝあると聞くが、これ實に前轍を踏まんとするもので

あつて大いに戒飾すべきである。勿論、敬神尊祖は國民的自覺を強固にする爲に、大いに之を鼓吹し奨励せなければならぬのであるが、然し佛教の信仰の盛んであつた時は人は自ら敬虔の念を以て神社を崇拜したのである、今や根本の信念を涵養することを疎外して神社崇拜を奨励せんとするのは本を忘れて末を追ふものではなからうか。吾等が神社を崇拜する心情は、西行法師の歌に「何事のおはしますかは知らねども唯尊さに涙こぼる」とあるやうに、心情の自然の流露でなければならぬのである。此に於てか私は、神社崇拜と佛教の信仰の關係は、之を如何に解すべきかと云ふ此の根本の問題にまで進まねばならぬのである。

一般宗教の分類には種々あるが、其の中に民族的宗教と世界的宗教といふ分け方がある。民族的宗教といふのは一族の風俗、習慣、口碑、傳説に依つて成立した宗教であつて、之を奉ずる者は其の民族だけに限られてゐるのであつて、例へば猶太教、印度教の如きは其の代表的のものである。此の種の宗教の特徴はその民族に義務附けられた宗教であつて他の民族に宣傳すべきものでない、否、寧ろ異民族、異教徒は之を拒絶し、印度教の如きはその神殿内に入ることすら許ないのである。従つてその宗教の性質上、假令他の民族に宣傳しても宗教としての權威のないものとなるのである。例へば各目の祖先を祭つた佛壇は其の家族に取つては無上の權威あるものであるが、その家族と關係のないものに對しては其の權威を強うることの出来ないと同じである。故に民族的宗教の特徴は非宣傳の宗教であるといへるのである。次に世界的宗教とは民族や國家の範圍を脱して世界中に宣傳せらるべき宗教である、地理的に民族といふ一團隊の埒を踏み越え廣く世界に弘むべき宗教であるが、必ずしも事實上世界中に弘まつてゐなくても、其の宗教の性質が世界のいかなる民族も之を信すべきものであれば、其は世界的宗教といはるのであつて、必ずしも事實上地理的に世界に弘ま

つてゐる宗教といふ意味ではないのである。それであるから世界的宗教は地理的には民族宗教に比して非常に擴大せられてゐるのであるが、實際に於ては一個の人間を對象とした宗教であつて、苟も人間である以上は、世界の如何なる種類の人間でも之を信じなければならぬ、といふ如き教であるから、其の宗教の理想通りに宣傳せらるゝならば事實上世界的宗教となり得るのである。従つて此の宗教は人間性に基いた宗教であつて、民族又は國家といふ如き團隊に基礎を置いたものではないのである。そこで此の世界的宗教の特徴は、人間の宗教として如何なる民族にも宣傳せらるべき宗教であるといふことに在るのであつて、基督教及び佛教は其の代表的のものである。

さてわが日本の神社崇拜を基本とする神道は、古事記、日本書記等に傳へられてゐる建國の大本より流れ出でたる日本の歴史にその根據を有ち、日本固有の風俗習慣、口碑傳説の中に生きて來た民族精神の宗教化したものであるから、民族宗教と言ふことが許されぬとしても、民族宗教と同じ性質の者といふことは認めざるを得ないのである。此に世界的宗教としての人間本位の佛教の信仰と、民族的宗教と類似した神社崇拜とは如何に之を調和し理解すべきであらうか。

われ／＼人間と言ふものは幾重かの社會的規定を受けてゐるのであつて、之を日本の國家組織の上から見るならば、吾々は家族の一人であり、町村、國縣の一員である。然しながら、斯様な社會的規定を漸次に除き去つて、全く一個の赤裸々な人間として、その價值を自覺する時、人間としての宗教が要求せらるゝのである、其の人間としての宗教が即ち佛教である。然し、現實には人間と言ふ抽象されたものはなく、人は必らず種々の社會的規定の下に生活せなければならぬものであるから、吾々は家族の一人であり、町村の一員であり、國家の一人であるのである。之等の社會規定の中で建國の初めより、永久に歴史の中に改廢を許るさない民族的團結としての國家は、最高の權威あるものであつて、家族、

町村等の社會規定は、一個の人間が此の最高規定としての國家組織に達する中間的のものに過ぎないのである。勿論國民の一員としての個人と、一般人間としての個人とは同一人であるから、國民として神社崇拜の神道にのみ依つて生きるこゝとが出来ればそれで充分なのであらうか。固より國民として生きるより外に一個の人間の存立は許るされないのであるが、國民としての個人と人間としての個人とは其の立場が異なるだけに其の働き方が相違してゐるのである。家族としての個人と、町村の一員としての個人、家長としての個人と、議政壇上の個人とは其の立場を異にするだけに其の思想行動も自ら異なるものがあるのである。

一例をあげんか、吾人の日常の道德的行爲を標準にして見るならば、家庭にては善良なる主人公も一步家を外にする時彼は必らずしも善良なる市民ではない。又、市民としては衆人其の徳望を讃へ之を私淑して議員に選舉するが如き人も、一個の私人として他國に旅行する時は、彼必らずしも尊敬す可き人間としての行爲をするものではないのである。手近く吾人の常に經驗することであるが、電車の中で老人や小兒づれが乗つて來ても、平然として席を譲らうとしない人でも、偶々知人が來ると無理をしても席を譲ると言ふが如きことを屢見受けるのである。私は此の知人道德を非難しやうといふのではないが、此處に一個の人間としての道德と、知人の道德との相違があることを指摘したのである。尙ほ之を大にするならば日本國民としては、全國に名聲の聞えた人でも、一度外國に一人として旅行する時、果して其の人は人間としての權威を保ち得るであらうか、國民の視線から離れて、所謂旅の耻はかき捨てといふが如き行爲をなすものがあると聞いてゐる。此に國民としての自覺と人間としての自覺の間には必ずしも一致しない点があることを注意せねばならぬのである。

こゝで吾々の反省せなければならぬことは、人間は其の社會的の種々の規定に従つて思想感情を異にし、義務も權利も異なるのであるが、其の何れの場合に於ても一個の人間の品位と價值とを自覺した一貫した精神に生きなければならぬことである。此に於てか立派な國民たる前に善良なる市民であり、善良なる市民である前に尊敬すべき家族であり、尊敬すべき家族である前に一個の人間としての品位と價值とを自覺せる立派な一人格でなければならぬのである。

國民の一人としての個人と、人間としての個人とは謂はゞ生物と魚類と言ふ様に元々一体ではあるが、一生物が魚として生存するには其の特有の生き方があるのであるけれども、生物一般としての生き方を決して離れてゐるのでは無いのである。されば人間としての正しき生き方を日本國民として生きる所に日本精神の發揚がなければならぬのである。此に始めて、古今に通じて謬らず中外に施して悖らざる人間の大道を歩むことが出来るのである。

之を宗教の上で云ふならば、家庭の佛壇は人間としての自覺に立つて、各自の祖先の徳を追慕する人間の美はしい感情の發露として、佛教的信念の自然の流露である。祖先を崇拜すること共れ自体が佛教の宗教としての根本義では決してないのであるが、佛教に依つて導かれたる人間としての宗教情操は自ら祖先崇拜となつて現はるのである。されば佛教の祖先崇拜は、かの宗教史に現はるゝ古代の宗教の一形式たる祖先崇拜とは、之を同一に見ることの出来ないものである。家庭に於て鄭寧に佛壇を祭る人は、必ず又町村民としては懇ろに氏神を祭り、國民としては、建國以來民族の發展に力を盡し國家を負ふて立つた歴史上の偉人を祭つた神社に參拜して、その恩徳を感謝し、その遺風を追慕するのである。斯くして國家は萬世一系の皇室を戴く一大家族であり君民一致の美はしき吾が國体をなすのである。斯る國民精神より始めて始めて忠君即ち愛國であり、忠即ち孝となるのである。忠孝の思想は元は儒教道德より來たものであり、支那に於て

は忠と孝とは別のものであるが、わが日本の道徳となつて始めて忠孝一体となるのである。彼の平重盛が、忠ならんと欲すれば孝ならず、孝ならんと欲すれば忠ならず、重盛の進退此に在る、といふた如きは人間の自覺に發した此の日本精神の煩悶と見るべきである。

近來、人間としての、尊き自覺に根を下ろせる、人間の宗教としての佛教の信仰が衰へ、且つ歪められた結果は、家庭の宗教の力が弱くなり、家庭の宗教的儀式はすゞで形式として段々簡略せられ來たことは甚だ遺憾である。勿論、形式や虚禮を廢することは結構なことであるが、形式と共に同時に精神をも捨ててゐる、否、精神の發露としての神聖なる儀式を悉く虚禮としてゐる。斯くして家庭の宗教が日々破壊せられつつあるは實に慨嘆に堪へないのである。

人間の成長する搖籃である家庭は、同時に又、人の生命の行くべき道を照す光となるべき信念を植ゑつくる宗教意識の苗床である。然に家庭の宗教が破壊せられ、兒童の宗教意識の萌芽を其の二葉の時に切り取つて、而して小學教師は兒童に神社崇拜を奨勵し且つ之を強要してゐる。若し人間の心情が近きより遠きに及ぶものであるならば、これは根を絶つて枝葉の繁茂せんことを求むるものであつて、其の神社崇拜が單なる儀式に流れなければ甚だ幸ひである。

近頃都會に於ては、葬式が華美になり繁雜に過ぐる爲に、今の時代に不適當な虚禮形式であるとして告別式といふものが盛んになつたが、その告別式も亦虚禮形式となりつゝある。何故に人は告別式をも廢せないのか、若し人間に告別式も廢して死骸を野に捨て山に捨つるに忍びない一片の眞心があるならば、親愛なる者への永遠の決別に際して、尊嚴なる宗教儀式に依つて懇ろに之を弔ふ人間の眞情を理解し之を尊ぶことが出來ないのであらうか。

全て儀式といふものは、それが形式となり虚禮となる以前を考ふるならば、必らずや人間の純粹なる心情の自然の發露

であつて、決してそれは初から虚禮でも形式でもなかつたのである。然らば、凡ての人間の儀式が虚禮となるといふことは、其れだけ人間らしい精神の失はれゆくことではないか。寒中に、震ひながら羽織袴で扇子を手に持つて年始の廻禮をする人の禮儀が廢せられて、三伏の暑中に赤裸で食卓に向ふ人間となつてしまつたならば、一体人間の尊さは何れにあるのであらうか、人間の尊嚴なる價値の自覺が形に現はれたものが儀式である。自己の人格の品位を自覺し同時に他の人格の尊嚴に敬意を表するのが儀禮であるから、人格としての自覺のない動物には儀式はないのである。然らば何故に虚禮を廢止せよ、形式を廢せよ、と言ふ代りに虚禮、形式に精神を入れよ、と叫ばないのであらうか。此に於てかいづれの宗教でも儀式を最も重んずる理由も理解出来るのである。従つて又儀式が漸次廢れることは、宗教の權威の失はれ行く現實の證據と見らるゝのである。されば形式を廢せよと言ふことは、人間が自然の状態に生物として生きよと言ふと同じであつて、物質偏重の文化は人間を生きた機械となしつつあるのである。此の人間に魂を入れるのが人間の宗教でなければならぬのである。

斯くの如く、今日では一般に神聖なる儀式が漸次廢せられ、家庭の宗教は次第に破壊せられ、人間の宗教意識を次第に枯渴せしめて、而して國民に敬神尊祖を鼓吹し奨勵しやうとする、それで果して眞の日本精神の自覺涵養が出来るであらうか、此に私は何としても生命の奥底に根を下した人間の宗教がなければならぬと思ふのである。

先に述べた例に就て云ふならば、魚が生物を離れてないが如く、神道は民族本位ではあるけれども、固より人間としての自覺を忘れたものでは決してない、又、生物が魚としての一つの生き方をなすが如くに、人間本位の佛教は、實際生活に於ては國家を離れることは出来ないものであるから、日本の佛教はどこまでも日本精神の佛教であるのであつて、恰も

吾等の精神は肉躰を通して働くが如く、人間としての宗教は民族精神を通して發露するのである。これは理論でなく吾々が日本の歴史を繙くならば、明かに觀取することの出来る事實である。

然し、此の民族本位に立つと、人間本位に立つとは、其の基調を異にするだけに其の行き方が自ら異つてゐることを忘れてはならぬのである。

神道の學者は宗教學の立場から、神道が民族的であることに満足しないで、之を普遍化して廣く人間の宗教としようとして解釋し努力して居るやうである。即ち天照皇大神を基督教の神の如く、全世界の人類の神として之を普遍絶對の人間一般の神としようとして居るやうである。固より何れの神でも、神格として立つ以上は普遍絶對の最高の屬性を附與して、之を理想化することが出来るのであるけれども、其の点を高調すると民族神としての生々した權威を弱めるものである。即ち民族的宗教は、之を一般化すれば其の固有の民族的威力を失ふものである。それで私は、天照皇大神はどこまでも日本民族の大本として吾等日本民族に君臨し給ふた大御神として、其の威靈を仰ぎたいのであつて、支那民族や西歐の民族にも同一の威靈の及ぶことを欲しないのである。其處に民族神としての力があり、日本精神の洪源として至上の權威を感受することが出来ると思ふのである。彼の世界大戰に於て、同一の神を奉じ人道博愛を教へ、汝の敵を愛せよと教ふる基督教國民が、相互に矛を交へ國を賭して戦つたのである。此の前古未聞の世界の大慘劇中に敵も味方も、神よ吾に勝利を與へ給へ、吾に正義を與へ給へと眞劍に祈つたのである。さて翻つて考へて見ると、敵も亦味方と同じく、同一の祈を眞劍に祈つてゐるのであることを思ふと、此の國家興亡の眞劍の祈に疑が起つた、即ち神は果して敵味方何れに正義を與へ勝利を與へるのであらうか、いかに全知全能の神でも、敵味方を同時に勝たしめ同一に正義を與ふることは出来

まいと。此の事實上の疑惑は戦後歐洲の基督教の信仰に少からず動搖を起こさしめたのを、私は當時歐洲に在つて親しく見聞したのである。此に於てか吾々は、日本民族の大本として日本精神を象徴する旭日の御旗の翻る所、日本の統治權の及ぶ所に御稜を垂れ給ふわが大御神の、君臨し給ふことを力強く思はざるを得ないのである。若し前に述べたやうに、之を普遍化して人類一般の神とするならば、唯一神を奉ずる人間の宗教としての基督教では、一人にして二ツの絶對の神を奉ぜねばならぬことになつて、二神一体とならない限り二ツの人間の生命の指導となる宗教を有つことは、人格の分裂をなさない限り不可能なのである。

此に於てかキリスト教では、往々にして神社不拜の事件が起つて問題となるのである。これ恐くは前に述べた如きわが日本の神社崇拜の本來の意義を理解してゐない爲であつて、民族を守護する神としてならば、之が崇拜を拒否する理由は毛頭ないのである。否、基督教が正しい人間の道を教ゆる宗教であつて、大人は大人、小供は小供、男子、女子各其の人間性の正しき發揚を導くものならば、日本の基督教信者は當然日本の神社を拜し得る如き立派な日本人とならなければならぬのではなからうか。されば、日本の神社崇拜が宗教であるが如く、又宗教で無いが如く取り扱はれてゐるのも、亦此の邊に起因するのではないかと思ふのである。超越的神の道を傳ふる基督教に於てすら已に然りであるならば、人間の自覺に基き人間性の開發に始終する佛教に於ては尙更然りといはれなければならぬのである。

佛教と他の宗教との間に目立つて相違することは、神の道を傳ふると言ふ所謂天啓の宗教は常に排他的になるが、人間の自覺に基づく佛教は常に包容的であると言ふことである。此に自覺の宗教としての佛教の特徴が明白に示されてゐるのである。

「天啓」と言ふことと「宗教」と言ふことを同義語とする従來の西洋流の宗教の理解からして、佛教の如きは宗教でないと言ふものもあるが、理論は暫らく措いて、事實の上で佛陀の教は天啓教と同じ使命を果して居る以上、果してそれが所謂の宗教でないとしても、其の代りに吾々は佛教を持ち得ることを誇りとするものである。今此の兩者の相違点を簡單に示す爲に例を以ていふならば、天啓として與へるものを持つ神の宗教は「汝の持てる柿を捨てよ、それは澁い、われ今汝に他の甘き柿を與へん」と言ふが如きものであり、又此の一杯のコップの水を不淨として之を捨てしめなければ他の水を盛ることが出来ないといふやうに、本來自己の所有する者を捨てなければ、神の道を受け容れることは出来ないから自然排他的となるのである。然るに、自覺の宗教としての佛教は之に反して、天啓的に他から與へらるものは何もないのであつて「如實に自心を知れ」と言ひ「自家の寶藏を開く」と言ひ、他より來るものは家珍に非ずといふやうに、人間のもつ本來の價値を自覺し之を開發せしむるのである。故に「汝の持てる柿は澁い、われ今佛陀の慈光に依つて之を甘くせん」と言ふが如く、其の持てる柿を其のまゝ甘くするのであつて決して之を捨て、他と取り代へるのではない。煩惱即菩提といふも蓋し此の意味である。此の一杯の水は濁つてゐるから、われ今般若の智に依つて之を濾過して清淨にせん、と言ふのが佛教の教であるから、佛教が日本に入れば日本の宗教として日本人の持てるすべてのものを成熟せしめ、その汚れたるものを清淨にするのが佛教の使命である。さればこそ人間の宗教としての佛教は、日本に傳つては日本精神を通して大乘佛教の精華を發揮し花を開き實を結ぶことが出来たのである。

斯くの如く佛教は神の宗教でなくして人間の宗教であるから、神の宗教の分類である一神教や多神教や汎神教の分類に當て嵌めることは出来ないのであるが、人間の立場からして其の何づれの表現をも取り得るのである。故に佛教には

一神教的のものも、汎神教的のものも、はた又多神教的のものもあるわけである、就中一神教的表現の強い浄土門の一派では屢神社崇拜と相容れないやうに考へて、大麻を受くることを問題とするのであるが、これ又神社崇拜の意義を正しく理解しない爲であつて、基督教すら前述の如く、日本の基督教は當然日本の神社を崇拜せなければならぬとしたならば、浄土門も佛教である以上尙更その本源に立ち歸へつて人間の宗教として、汝の有てるものを意義あらしむるものでなければならぬのであつて、信仰に熱烈なる爲に却つて偏狹に陥る如きことがあつてはならぬのである。

さて然らば、日本の佛教徒として神社に對する信仰は結局如何にあるべきものであらうか、之を簡明にいふならば、一個の人間として内に尊き人間の價値を自覺し、又國民としては美はしき日本精神に生きることが、その生活を内外より規定して、此に完全なる日本國民として世界に其の尊嚴を誇ることが出来るのである。斯くして始めて人類の爲の日本精神の發露となり世界文化の爲の活躍となるのである。而して此の理想は今始めて私が之を唱ふるのではなくして、已に遠く本地垂迹の信仰は此の意味を現したものである。内には人間の理想としての佛陀の自覺に發し、外には日本精神の權化としての神社崇拜に依つて、權威ある國民的自覺に生きるこの内外二重の調和こそ、本地垂迹の信仰なのである。人間の理想としての佛陀が、日本精神の權化として現實生活に現はれたといふ彼の權現の信仰こそ佛教徒の國民的信仰であつて、吾々は此の信仰を有つことを誇りとするものである。蓋し民族神と人間の宗教とを狭く一体として、民族宗教のみに止るならば、猶太教や印度教の如く極めて偏狹なものとなつて、人類一般の理想に向つて進む遠大な抱負と活力とを失ふこととなるから、わが日本の神社崇拜は民族宗教であつてはならぬのである。それだからといつて、之を廣くして民族神を一般化し人類一般の神とすれば、民族神としての威力を弱めねばならぬのであるから、此の意味に於て、神社

崇拜は一般人間の宗教となることを欲しないのである。要之、日本の佛教の立場からは佛教の外に神社崇拜はなく、神社即ち佛教とならねばならぬのである。換言するならば、神社崇拜自体が宗教ではなく、佛教の信仰を通して始めて宗教的意義をもつものであるといはねばならぬのである。日本人が、印度の釋尊の教に依つて佛と作つたとしても、其は決して印度人になるのではなく、どこまでも日本人としての佛であり、之を神社に祭れば即ち權現となるのであるから、日本の佛は即ち神でなければならぬのである。そこで吾等は、佛陀の教を奉じて貴き人間の價値を自覺し、生命の奥底より湧き出づる信念の力を以て、日本精神の權化として祭られたる神社に心から跪いて、萬世一系世界に比なき光輝あるわが國体を護る一人たることを喜び、且つ感謝したのである。此に始めて「唯尊さに涙こぼるゝ」といふ人間の眞の宗教心の發露として、神社に參拜して日本精神に生きることが出来るのである。

日本精神を唱導する或學者が、佛教徒たる先に日本人たれ、といふたといふことであるが、これは佛教を地理的に考へて、佛教は東洋の宗教であるから東洋人たる前に日本人たれといふ意味で、佛教徒たる前に日本人たれといふたのであらうが、それでは人間の宗教としての佛教の本義を見逃してゐる。佛教が若し人間の宗教ならば、人間たる前に日本人たれといひ得ないやうに、佛教徒たる前に日本人たれといふことは出来ない、宜しく日本人たる前に佛教徒たれといふべきである。其は即ち日本人たる前に正しき人間としての自覺を要求するからである。

我等は日本國民である以上、建國以來日本の歴史に成長して來た日本精神は脈々として吾等の血管に流れてゐるのであり、教育の普及した今日では、小學の兒童に至るまで吾が國体の精華を知らないものは一人もない筈である。只之を自覺し、之を感得し、之を誇とし、之を感謝する人間の至誠の眞情が欠けてゐる。これ、人間を心の底から動かす宗教的

信念に俟たなければならぬ。されば日本精神の反省せらるゝ今日、忘れたる者を探すが如く、其の正体を古書に之を求むる机上の理論よりは、吾等の血管に流れてゐる日本精神を正しく生かす力が必要である。左に右に動搖する日本精神を確かに中正の位置につなぎ止むる生命の力を求めたい。此の力が欠けてゐるから、教育勅語の精神に生きねばならぬ教員が赤化したり、國体知識の結晶であるべき校長の不正事件も起るのであり、廣く社會の諸方面の不安動搖の根源は、正しき人間としての自覺と信念とを確立してゐないことにあると思はざるを得ないのである。今日吾國民に欠けてゐるのは日本精神の知識でなく、國体の觀念でもない、人間を魂から動かす力即ち信念が欠けてゐるのである。内に正しき人間としての確乎不動の信念があつて、權威ある國民的自覺を通して外に働きかける時、赤化も出來なければ賄も出來ない正しき日本精神の活躍とならねばならぬのである。此に於てか宗祖道元禪師の「此の一日の身命は貴ぶべき身命なり貴ぶべき形骸なり」といはれた如き生命の價値を自覺する宗教的信念の確立が何よりも急務であると思ふのである。

私は佛教徒であるから護教的にかくの如く論ずるといふのでは決してない。佛教徒としての私は、已に最初に先年の反宗運動に對して述べたやうに寧ろ之を迎へたいのである。私は、佛教の現状が決して理想的のものとは思はない、永い年月の間に實際勢力を有つてゐただけに、種々の弊害が伴ふて眞の佛教の信仰が殆んど見失はれてゐる程に思ふのであるが、内部からの改造は容易に行はれない事情があるのであるから、外部から其の弊害や欠点を批判して、之を排除する如き強い刺戟を與ふるといふことは、やがて佛教を甦生に導く所以であると思ふので、批判的な反宗運動は寧ろ之を歓迎すべきであると思ふ。佛教にしてもし永遠の眞理の上に立つ人間の宗教であるならば、如何なる強い排佛が行はれても必ず又新なる意義と力とを以て甦生するものであると堅く信ずるのである。之を佛教の歴史に見ましても、遠く支那の三武一宗

の法難、近くは明治維新の排佛でも、其の後には必ず佛教が新なる力を以て甦生してゐるのである。殊に支那の排佛の如きは、經卷を焚き寺院を破壊し、僧尼を殺戮した程の極端なる排佛であつたのであるが、いづれも僅かに一代にして其の後には必ず多くの高僧碩徳が輩出して佛教は復興してゐるのである。されば私は、佛教は永遠の眞理の上に立つ眞の人間の宗教であつて、いかなる力も、其の精神を亡ぼすことの出来ないものと信じてゐるのである。それで私は宗派的な偏見から今日の日本精精運動を非難しやうといふのでは決してない、否、近時の世界の大大勢からして、從來にも増して、愈國民的自覺を強固にせねばならぬことは吾人の痛感する所である。況や近來屢身にするが如く、此の兩三年は吾國は國際的危機に直面してゐるといはれるに於ては、爲政者の立場から特に日本精神を高調して國民の自覺を促し、一旦緩急の時には國民一体義勇公に奉ずる決心を堅めて置くことは、實に刻下の急務であると思ふのである。然しながら、これは決して從來の思想運動の如く、一時の流行に終つてはならないのである。又之を機會として地方の眼界の狭い神道者流が、宗派的偏見に捉らはれて其の教勢の擴張に利用し、地方の公人亦日本精神といふ權威ある名に依つて之に追従し、其の結果期せずして排外的となり反宗教的となるが如き大勢に導かれては、今日衰へたりと雖尙國民大多數の信仰は佛教であり、之に次いで其基督教であるが、佛教や基督教の信仰を疎外し、恰も之を日本精神に反するものゝ如く云爲するに至つては、國民大多數の生命の宗教としての信仰を侮辱し、之を破壊して、さなきだに不安動搖の民心を攪亂し、民心の統一を求めて却つて之を破り、心から崇拜すべき神社に對しても、信心の誠を失ふて強制的になり外型的になるが如きことがあつては、所謂角を矯めて牛を殺すが如き結果にならぬであらうか、といふことを深く憂慮するの余り、神社崇拜の意義を明かにして宗教一般特に佛教との關係を力説したのである。私は國民の一人として此の國家非常時に際して大

いに意義のあるべき日本精神運動の歪められたる傾向を見聞して、私の日本精神は之を黙過するに忍びないで、由來時事を評論したことの無い私が敢て此の機會を利用して卑見を公開し諸君の反省と理解に訴へた次第である。

お 断 り

本稿は、過般の佛教學會卒業生送別豫餞會に於ける先生の御講演を速記せるもにて、文中誤り無きよう努めたるも充分に御講演の内容を傳へ但ざりし怨ありて、此の點深くお詫び致し度、先生並に大方の讀者諸賢の御許しを乞ふ次第であります。

(文責 小西)